

ボールゲームにおける個人戦術のスポーツ運動学的研究

ーバスケットボールゲームにおけるミスプレイに着目してー

森田重貴 嶋谷誠司

要旨

本研究では、ターンオーバーを多発するチームにおいて、フリーランスオフェンスの攻撃法を用い、バスケットボールの攻撃における個人戦術のパスをすべきかドリブルをすべきかに着目し、ボール保持者の次のプレーが「パス」か「ドリブル」かという選択について、状況に適合した選択行動を適切に行えないバスケットボールプレイヤーにおいて、ターンオーバーの減少させるための戦術行動の課題を明確にしようとした。そこで、適切に次のプレーを選択させる方法として、ディーン・スミス氏の考案したフリーランスオフェンスの考え方を簡素化したものを図式化し、`行動規範のトレーニングチャート`とし、また`行動規範のトレーニングチャート`から実践トレーニングを作成し、トレーニング群とコントロール群の二つのグループに`行動規範のトレーニング実践`を行い、その効果を観察した。

結果として、トレーニング群はターンオーバーの減少や行動規範に沿わない選択が減少するなどの効果が見られた。

1. 問題の所在と研究の目的

ボールゲームは一般的に、規則に基づいて、二手に分かれた敵と味方がひとつの対象物を介して共通の目標をめぐる対決するスポーツ、と示されている(文献6-105頁)。

また、バスケットボール競技は、ボールの所有とシュートの攻防をめくり、相対する2チームが同一コート内で同時に直接相手と対峙しながら、一定時間内に得点を争うゲームであるとされている。

また、バスケットボールのコーチである吉井は、攻撃においては、より多くの得点をあげるといった目的を達成するための原則的プレイとして、①シュートする。②相手の防御を打ち破れ。③ボールの所有を失わない。という3つをあげている。確率の高いシュートをするためには、

相手の防御を打ち破り、ノーマークでシュートすることやゴール下近辺でのシュートをする回数を多くし、なお、攻撃の途中においてボールの所有を失わない、ターンオーバーをしないことである。つまり、攻撃では、この3原則からボールの所有を失わず、相手の防御を打ち破り、より確率の高いシュートをするという一連の流れを作ることが必要となる。

しかし、バスケットボールは「ハビットゲームと言われる反面、ミススポーツと言われていている。バスケットボールは特性やルールによって動きなどが制限されているため、極めてミスが発生しやすいスポーツ(文献27-6項)」とされている。

バスケットボールは、1891年に創案にされ、それ以来約120年を経て、ルール改正と技術・戦術が相互に規制しあいながら発展・進化して

きた。

近年のバスケットボールは、大きなルール改正が行われ2001年には前後半制から4ピリオド制になり、24秒ルール、8秒ルールなどの時間に関わるルールの変更が行われた。また、女子においては2004年にボールサイズが7号から6号にサイズが変更になった。このようなことから、バスケットボールはルールの変遷において近年ではスピーディーなゲーム展開が行われるようになったと思われる。つまり、ゲームがスピードアップされ攻撃の試行回数が増加し、それに伴い攻撃時にボールの所有を失うミスの増加が懸念されるものである。

ボールの所有を失うものとしては、大きく2つに分類することができる。一つは、攻撃の目的であるショットを試みたがはずれ、リバウンドボールを相手チームに取られるものと、ショットを試みる前にミスを犯し、所有を失うものであり、これをターンオーバーとされている。

また、このターンオーバーはトラベリングやダブルドリブルなどのルール上での反則によりボールの所有を失うものと、パスを防御側にインターセプトされたり、ドリブルをスチールされる攻撃側の選択ミスによるものや技術的なミスの2種類がある。

バスケットボールの攻撃は、パスとドリブルの個人技術を用いながらショットを成功させ得点をする事が目的である。このパスとドリブルは、攻撃時に使用される個人技術として重要なものであるが、パスとドリブルの使用するタイミングや場所を間違えば、防御側のものとなり、ターンオーバーとなって、ショットをすることのみならず、防御側に簡単にボールを奪われ、相手に得点を簡単にあたえることになりかねないのである。『いまは、ドリブルでゴールにペネトレイトしておけば』や『いまは、ドリブルをするのではなく、ノーマークの○○にパスだ』というようなチームメイトや自分自身がショットできるような場面であったり、または、『ドリブルをしたから、とられてしまった』や『パスではなく、ドリブルで攻撃していればボール

は取られなかった』というような場面が練習や試合の場面でよく見られるのである。

また、運動学の分野では、「精形態は、いわば自然に発生をした粗形態をただ繰り返しているうちにできてくるものではない。すなわち粗形態は人為的に改善されて精形態に至るものである。(文献17-135項)」とされている。さらに「まず最初に運動は、いくつかの欠点を残しながらも、あるまとまりをもったおおざっぱな形態で習得される。(運動の粗形態の発生)その後、技術的な完成をめざして意図的な練習が繰り返されることによって、運動は修正され、洗練されて、次第に合目的なかつ経済的となって、余分な動きや動きのぎこちなさなどがなくなり、運動の流動や弾性などの質的な高まりを示すようになる。次の段階において、運動は自分の意のままになるように自動化され、とりわけ意識しなくてもできるようになる。そしてさらにあらゆる外的・内的な障害に対してもうまく対応できるようになるまで安定化させることが目指される。このような段階までに運動の習熟を高めることは、自らのもてる力を試合で最大限に発揮するためには大切である。(文献17-219項)」ことが指摘されている。

このようなことからバスケットボール競技では、日々の練習においてコーチとプレイヤーによって、練習は計画的かつ合目的におこなわれ自らのもてる力を試合で最大限に発揮するための訓練が重要であり、自分たちやミスを犯すことなく訓練を積み重ねなければならない。

このように、日々の練習段階においてボール保持者によるプレイングの選択行動のミスが頻繁に繰り返される場合には、指導者によってフォーメーションやパターンオフenseをすることにより、ボール保持者や非ボール保持者の行動の選択を制限し、ターンオーバーをさせないようにしてきたのである。

しかし、フォーメーションやパターンオフenseは、パスとドリブルをする順番を決められるため、防御側に動きを読まれやすく攻撃を封じ込まれることがあり、ショットまでいくこと

ができないことが見られる。

そこで、指導者は、フリーランスオフェンスと呼ばれる一定の原則に従いながら、各プレイヤーに自由な判断によって展開されるオフェンスを用いることになるが、フリーランスオフェンスにおいては、各プレイヤーのパスかドリブルの選択の習熟度が、攻撃における確率の高いショットができた、できないの結果に直結するものとなる。

そこで、本研究では、ターンオーバーを多発するチームにおいて、フリーランスオフェンスの攻撃法を用い、バスケットボールの攻撃における個人戦術のパスをすべきかドリブルをすべきかに着目し、ボール保持者のパスかドリブルの選択について、状況に適合した選択行動を適切に行えないバスケットボールプレイヤーにおいてトレーニングを行い、パスかドリブルの選択行動がどのように変容していくかを検証していく。

II. 研究の方法

問題の所在で記述したとおり、バスケットボールの攻撃において、ターンオーバーをせずにショットをするためには、適切なパスかドリブルの選択をすることが重要である。そこで、本研究では、適切に選択させるような方法として、ディーン・スミス氏の考案したフリーランスオフェンスの考え方をもとに、このフリーランスオフェンスの考え方を簡素化したものを図式化し、¹「行動規範のトレーニングチャート」とした。また、²「行動規範のトレーニングチャート」から実践トレーニングを作成し、³「行動規範のトレーニング実践」を行った。

本実験では、ハーフコートのセットオフェンスの際における、ボール保持者のパスかドリブルかの選択に着目し、トレーニングを行うことで、実践者がどのようにプレー選択について変容していくかの検討をすることを目的としている。

そのため、ゲーム実践においては、攻撃時間（ショットクロック）の残り秒数は、16秒とした。設定理由としては、①バスケットボールの競技規則において、「フロントコートに8秒以内でボールを進めなければならない」とある。

②日本の国内ゲームをVTR分析してみると、ボールがフロントコートに進み、チームオフェンスを開始する体制が整うまでが8秒程度である。それらを考慮した結果、今回のゲーム実践におけるショットクロックの残り秒数は、16秒とした。

フリーランスオフェンスは、「各プレイヤーにかなり自由性と主体性を与えているが、ボールを持っているプレイヤーと持っていないプレイヤーのそれぞれの動きに簡単なルールがある（文献34-233項）」とされている。長所は、「シンプルな面と柔軟性をあわせもつことや相手のスカウティングが困難である（文献34-234項）」が挙げられており、短所については、「能力のあるプレイヤーが個人プレーに走りがちになり、チームプレーを壊す懸念がある（文献34-234項）」とされている。

この、フリーランスオフェンスは、ノースカロライナ大学のヘッドコーチであった、ディーン・スミス氏が積極的に用いた戦術である。ディーン・スミス氏は、フリーランスオフェンスを用いた理由として、①指導が簡潔であること、②マンツーマンだけでなくゾーンにも対応できることを挙げている。それだけ、汎用性や多様性のあるオフェンスであると考えられる。

また、現在日本で行われている日本バスケットボールリーグ（JBL）やバスケットボール女子日本リーグ（WJBL）などでも、多くのチームがフリーランスオフェンスの考え方を導入しており、有効なオフェンスシステムであることが実証されている。

対して、パターンオフェンスについては、「5人の動きが規則正しくパターンとなってオフェンスを行い、パスのいく方向、人間の動きがあらかじめ計画されたプレーシステムである（文献34-234項）」とされている。パターンオ

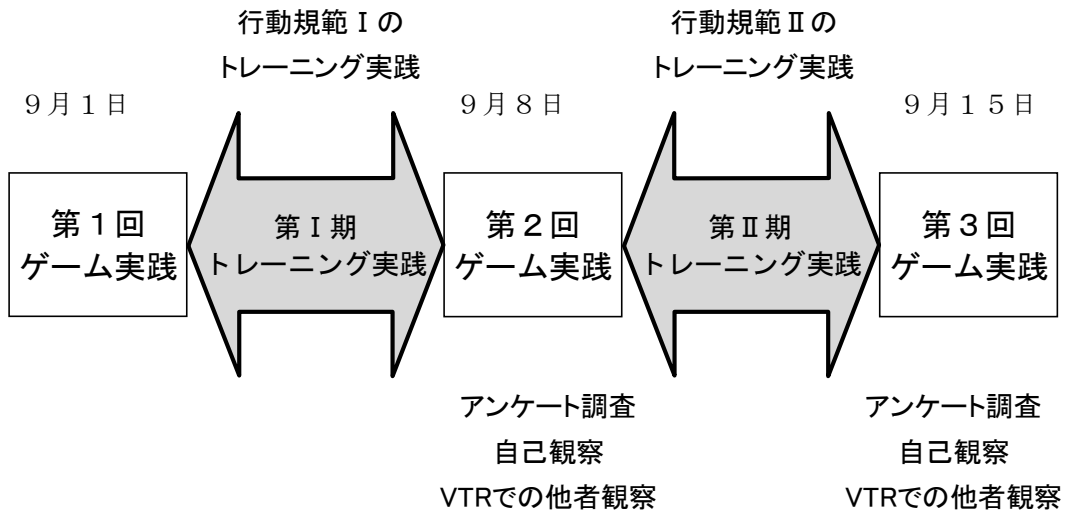


図1. トレーニング実践の流れ

フェンスでは、「動きが決められているためスムーズな動きがとれ、動きそのものの習得は難しくない反面、相手に動きを予測されやすい(文献34-234項)」という短所がある。

以上のようなことを参考にしながら、フリーランスオフェンスは、ボール保持者によるパスかドリブルを選択する状況も多く、また、練習や試合などの実践場面での汎用性も高いと考えられる。

本研究では、このフリーランスオフェンスの攻撃方向を参考に、ボール保持者におけるパスかドリブルを選択するための「行動規範」を作成し、それにもとづき、実践を行うものとする

1. 行動規範及び行動規範のトレーニング実践について

「行動規範のトレーニングチャート」は、ボールをキャッチした状態から始まり、ショットできる場合にはショットを狙い、また、自分を守っている防御者の状態が悪い(自分自身が有利な状況)であれば、ドリブルを選択し、ドリブル1:1の攻撃をすることとした。次に、ショットができない場合やショットできるエリアでボー

ルをもらえなかった場合には、パスによって攻撃をする選択とした。そして、パスでショットチャンスができればパス、ショットチャンスができなければ、ドリブルを選択し、ショットにいければショット、ノーマークができればパス、ショットもパスも出来なければドリブルを継続するというボール保持後のプレイの「順次性」と攻撃の「円環性」の図式化したトレーニングチャートを作成した。

また、トレーニング実践では、トレーニング実践を行なうトレーニング群とトレーニングを行わないコントロール群と分け、トレーニング群において、行動規範のトレーニングチャートを実践トレーニング化したものを防御者をつけない状態で動きの確認をしてもらった。

2. トレーニング実践の概要

トレーニング実践は、トレーニング群を対象に実施し、計3回のゲーム実践のインターバル期間に行った。

ゲーム実践の第1回、第2回の間1週間を第Ⅰ期トレーニング期とし、第2回目、3回目の間1週間を第Ⅱ期トレーニング期とした。

なお、第Ⅰ期トレーニング期間では、`行動規範Ⅰ、にもとづいた`行動規範のトレーニング実践、を行い、第Ⅱ期トレーニング期間では、`行動規範Ⅱ、にもとづいた`行動規範のトレーニング実践、を行った。

Ⅲ. 考察内容の確認

本研究では、バスケットボールプレイヤーのボール保持者におけるパス行動、ドリブル行動の選択行動についての変容を考察対象としている。

そのために、ゲーム実践、トレーニング実践を行い、実践したことに関するアンケート調査を行った。また、ゲーム実践のVTR分析をし、考察するものとした。

今回は、ボール保持者におけるパスかドリブルの選択について、選択に関する`行動規範、を作成した結果、トレーニング実践者のパスかドリブルの選択がどのように変容していったかを検証するために、以下のような考察を加えるものとする。

①トレーニング群（TR群）とコントロール群（CO群）との比較

ボール保持者のパスとドリブルの選択について、行動規範を導入し、トレーニングを行うトレーニング群とトレーニングを行わないコントロール群との比較を行う。各ゲーム実践を行った際のVTR分析をもとにゲーム実践の結果内容を数値化し、考察を行う。さらに、トレーニングを行った群とトレーニングを行わなかった群との比較し考察を行う。

②トレーニング実践の内省報告について

トレーニング群において実施した、`行動規範、の導入および`行動規範のトレーニング実践、を行ったことで、ボール保持者のパスとドリブルの選択がどのように変容していったかを、第2回、第3回のゲーム実践後の自己観察から考察を行う。

③他者観察について

トレーニング群において実施した、`行動規範、の導入および`行動規範のトレーニング実践、を行ったことでボール保持者のパスかドリブルの選択がどのように変容していったかを、第2回、第3回のゲーム実践後のVTRを用いたトレーニング実践者の他者観察から考察を行う。

また、研究者は、計3回のゲーム実践のVTRをもとに、トレーニング実践者の他者観察およびゲーム実践後に実施したアンケート調査を用いて考察する。

④`行動規範、と`行動規範のトレーニング実践、の有効性

トレーニング群を対象に行った`行動規範、と`行動規範のトレーニング実践、が有効であったかをアンケート調査をもとに検証する。

Ⅳ. 結果と考察

以上のように、①トレーニング群とコントロール群との比較、②トレーニング実践者の内省報告、③他者観察について、④`行動規範、と`行動規範のトレーニング実践、の有効性についての4点より考察を進めてきた。ここでは、`行動規範、と`行動規範のトレーニング実践、をとおして、実践者のパスかドリブルの選択がどのように変容したかを考察し、まとめるものとする。

① トレーニング群とコントロール群との比較について

各ゲーム実践において`行動規範、と明らかに異なったパス行動、ドリブル行動の選択回数関係を数値化し、まとめてみると、トレーニング群（TR群）とコントロール群（CO群）では、以下のような結果となった。

表1より、トレーニング群においては`行動規範、と`行動規範のトレーニング実践、を行

表1 行動規範と明らかに異なったパス、ドリブルの選択回数

ゲーム 実践	トレーニング群			コントロール群		
	パス	ドリブル	合計	パス	ドリブル	合計
第1回	8	8	16	7	4	11
第2回	4	5	9	6	7	13
第3回	2	2	4	3	7	10

表2 トレーニング群とコントロール群のターンオーバー数の比較

ゲーム 実践	トレーニング群		コントロール群	
	ショット回数	ターンオーバー	ショット回数	ターンオーバー
第1回	5	5	5	5
第2回	8	2	6	4
第3回	8	2	6	4

い、ゲーム実践をした結果、`行動規範、に基づくパス行動・ドリブル行動の選択ができていなかった回数が、減少していることが数値からも読み取れる。しかし、コントロール群については、明らかな変化は見られなかった。

また、それぞれのゲーム実践において、ターンオーバーと`行動規範、にもとどく、選択行動の誤った回数を数値化した。トレーニング群において、ゲーム実践が進むにつれ、ターンオーバーおよび誤った選択行動の回数ともに減少していった。しかし、コントロール群については、明らかな変化は見られなかった。つまり、`行動規範、の導入および`行動規範のトレーニング実践、をとおして、パスかドリブルの選択行動が適切に行えるようになったため、ターンオーバーの回数が減少したことと考えられる。ターンオーバーが減少したことにより、攻撃の目的であるショットする行為が増加した。

② トレーニング実践者の内省報告について

ゲーム実践後のトレーニング実践者による自

己観察においては、「1：1を積極的に狙えるようになった」や「1：1がやりやすくなった」など、ドリブル1：1をすることに対して<迷い>がなくなり、<積極的>にドリブル1：1で攻撃できたと報告している。これは、`行動規範、の〈D2：誰もいないエリアにドリブル1：1をしよう〉を選択し、攻撃を行ったと考えられる。これは、<スペース>のあるエリアにドリブル1：1を行うためには、コート内の《フローバランス》が良い状態であること確認ができたものと考えられる。そして、《フローバランス》が良い状態であること確認ができた際には、ボール保持をしたときの攻撃では《積極性》のあるドリブル1：1を行うことができたと考えられる。

③ 他者観察について

トレーニング実践者の他者観察では、第2回ゲーム実践後では、「ショットまでスムーズにいけるようになった」や「ドリブル1：1をするスペースがつかれるようになった」と報告し

ている。

また、ドリブル1：1を行うための〈スペース〉を意図的につくりだし、意図的にできた〈スペース〉にドリブル1：1ができたことを報告している。

さらに第3回ゲーム実践後においても、「シュートまでスムーズにいった」や「1：1がやりやすい」と攻撃が〈迷い〉なく行われたことを報告しており、`行動規範のトレーニング実践、`を行った結果、ドリブル1：1を選択した際には、スムーズにショットまで行くことができるようになったと報告をしている。

また、研究者による他者観察では、第1回ゲーム実践においては、パスとドリブルの選択が適切に選択できず、ボール保持直後から、すぐにドリブル1：1を行いショットチャンスを作りだせず、苦しい状態でのショットやターンオーバーとなっていることが多かった。

しかし、`行動規範、`の導入と`行動規範のトレーニング実践、`を行った結果、ターンオーバーが減少しショットする回数が増えた。

第2回ゲーム実践においては、ボール保持者が非ボール保持者に『クリアー』させ、主体的に誰もいないエリアを作り出し、そこにドリブル1：1を行い、ショットまでいく場面がみられた。

また、第3回ゲーム実践では、ドリブル1：1からショットからではなく、最終的にパスによってショットする場面が増えた。これは、ドリブル1：1を行っているところに防御側がヘルプにいき、非ボール保持者が〈合わせ〉てパスを受け、ショットする場面や、ピック&ロールの2：2によってできたノーマークにパスをして、ショットしている場面が見られた。

このように、`行動規範、`の導入や`行動規範のトレーニング実践、`を行ったことで、パスとドリブルの選択を適切に選択する回数が増えたため、ショットまでスムーズに持ち込む回数が増えたと思われる。

④ `行動規範、`と`行動規範のトレーニング実践、`の有効性について

`行動規範、`と`行動規範のトレーニング実践、`についてでは、実践者は、アンケートの中で、「ゴールをみるという行動が忘れずできるようになった。」や「ボールをもらったらかくドライブばかり狙っていた。トレーニング後では、シュートを見る目とパスをするをを狙えるようになった。」というように、ボール保持後、`行動規範、`どおりの順番に沿ってプレイをする意識ができたことが示唆された。

パスかドリブルの選択については、`行動規範、`に記されているとおり、①ショット→②パス→③ドリブルの順番でプレイを行う〈順次性〉を理解し、プレイを行ったことで、「攻撃しやすかった」や「大切だ」と感じていることが示唆された。

また、ここでは、パスやドリブルの選択についても「無茶なパスやドリブルすることが、少し減った」や「無駄なドリブルはしなくなった」と報告している。これは、意図のないパスやドリブルをしなくなったと考えられ、`行動規範、`の中〈順次性〉と〈攻撃の円環構造〉とを理解し、パスかドリブルの選択が落ち着いてできるようになったと思われる。

特に、ドリブルを選択した場面においては、無駄なドリブルは減り、「ドリブルは、攻撃する際に使うようになった。」というように、ドリブルを使う際は、ゴールに向かう攻撃的なドリブルを使うようになったことが示唆された。

`行動規範のトレーニング実践、`の有効性については、「行動規範のトレーニングチャートは有効だったと思いますか？」の質問に対しては、「5人でまとまって攻撃ができた。」や「5人全員の意志が統一できていたので攻めやすかった。」との報告より、非ボール保持の状態であっても、ボール保持者のパスかドリブルかの選択を読み取り、ボール保持者がプレイしやすい動きや合わせをする〈予測・先取り〉を考えるようになったと考えられる。これは、ボール保持者、非ボール保持者の間で、攻撃するポイント

が明確になり、攻撃すべきところで攻撃が展開されるようになったと考えられる。

V. 結論

本研究の目的は、女子学生バスケットボールプレイヤーにおいて、パスとドリブルの個人技術は精形態レベルにあるのにも関わらず、適切にパスかドリブルの選択行動がなされないプレイヤーの個人戦術について、明らかにすることを目的としている。

バスケットボールにおけるパスとドリブルは、攻撃の目的であるショットをするために、防御を打ち破るための重要な個人戦術である。しかし、パスかドリブルの選択行動が適切に行われなかった場合には、ボールの所有を失い、攻撃の目的であるショットに至る機会を失ってしまう。

そこで、本研究では、ボール保持者のパスかドリブルの選択行動に着目し、ボール保持後の行動をトレーニングチャート化した行動規範を作り、それにもとづいて行動規範のトレーニング法を作成した。そして、行動規範のトレーニングの実践をとおして、パスかドリブルの選択行動がどのように変容していくかを検証していく。

行動規範と行動規範のトレーニングの実践をとおして、以下に示すような変容が見られた。

① ターンオーバー数の減少

コントロール群と比べ、トレーニング群ではトレーニング実践が進むにつれ、ゲーム実践においてターンオーバー数の減少が生じた。

② 行動規範に沿わないドリブルの選択の減少および積極的なドリブルの実施

トレーニング群ではゲーム実践において、ボールキャッチ後、すぐにドリブルをするような行動規範に沿わないドリブルの選択は減った。また、《フロアーバ

ランス》が良い状態であることが確認できた場面では、迷わず、攻撃的なドリブルを選択し、《積極的》にドリブル1：1で攻撃できるようになった。

③ 行動規範に沿わないパスの選択の減少

トレーニング群では、行動規範に＜順次性＞＜円環性＞があることから、次の攻撃がパスかドリブル1：1か《先取り》でき、ゲーム実践において、無理、無謀なパスが減少した。

④ コンビネーションの形成

トレーニング群では、行動規範に沿っての同一のトレーニングを行い、すべてボール保持者の行動を体験することから、非ボール保持者の場面においても、ボール保持者の選択行動に共感できていた。その結果、ゲーム実践において、ボール保持者のパスかドリブルの行動に対して、非ボール保持者は、《先取り》できることから、ボール保持者の動きに連携する《コンビネーション》の発生が生じるようになった。

⑤ 行動規範と行動規範のトレーニングの有用性

トレーニング群の内省報告では、「5人が同じ意識で攻めることができた」や「意志が統一できていたので攻めやすかった」と述べている。これは、トレーニング実践者において、行動規範と行動規範のトレーニングを行ったことで、チームとして、攻撃に際しての意志統一がなされ、パスかドリブルの選択行動に「迷い」や「混乱」がなくなり、ショットに至る回数が増えた。これは、行動規範と行動規範のトレーニングおよびパスかドリブルの選択行動の変容において、有用な関係性が窺われる。

以上の5つの変容において、行動規範と行動規範のトレーニングは、パスかドリブルの選択行動が適切に行われない対象者において、有用であることが示唆された。

VI. 展望

本研究ではバスケットボールプレイヤーの個人戦術におけるパスかドリブルの選択に着目し、行動規範と行動規範のトレーニングの実践を行い、パスかドリブルの選択行動の変容を明らかにすることを目的とし検討してきた。行動規範と行動規範のトレーニングの実践を実施すると、ターンオーバー数が減少し、スムーズにショットまで行ける回数が増え、攻撃の中で効果的なドリブル1：1が《フロアバランス》の良いエリアへ《積極的》に行うことができるようになった。また、ボール保持者の動きを優先させながら、非ボール保持者がボール保持者のパスかドリブルかの選択を《予測・先取り》しながら、パスかドリブルの選択に連携する《コンビネーション》の発生が生じた。

今回の研究では研究者が、関東女子学生リーグ戦2部に所属している女子大学生を指導していることから、女子大学生を対象としたが、パスやドリブルが自動化されていない対象者や男子選手などを対象にトレーニング実践を行い、パスかドリブルの選択行動の変容を明らかにすることも今後の課題として残されている。

また、今回の研究においては、パス、ドリブルの個人技術にはふれず、パスかドリブルの選択行動について検討したが、パスにおいてはチェストパスやバウンズパスなど様々なパスの選択やパスをする方向やタイミング、ドリブルについては、スピードの変化や方向変換など、パスかドリブルの個人技術の中にも、多岐にわたる選択の種類が存在する。今後、検討する必要がある。

また、^①行動規範、や^②行動規範のトレーニング実践、においても、^③行動規範、の文言や^④行動規範のトレーニング実践、では、トレー

ニングの実施方法において、更なる検討が必要である。今回のトレーニング実践では2週間という短期間でのトレーニング実践であったが、ゲーム実践における防御を打ち破る方法やショットの確率の向上など明確な変化は得られず、ターンオーバーの減少、ショット回数の増加にとどまった。しかし、実際の指導現場においては、2週間のトレーニングにのみならず、その後もトレーニングを継続していくことで実際のゲームにおいて有効に活用できると考えられる。

本研究において明らかにされた、バスケットボールプレイヤーの個人戦術におけるパスかドリブルの選択行動について、行動規範と行動規範のトレーニングの実践を実施した結果から述べてきたが、実際の指導の現場において、パス、ドリブル選択が適切に行われるように、本研究が貢献できることを願い、論を終えることにする。

引用・参考文献

- 1) 朝岡正雄：先取りに関する運動学的一考察、筑波大学体育科学系紀要7、1984
- 2) 朝岡正雄：体育指導に役立つ運動研究「学校体育5」、日本体育社、1989
- 3) 朝岡正雄：体育における運動学習の意義「学校体育6」、日本体育社、1989
- 4) 朝岡正雄：分かることできる「学校体育7」、日本体育社、1989
- 5) 朝岡正雄：運動の他者観察「学校体育8」、日本体育社、1989
- 6) Beyer.E編 朝岡正雄監訳：スポーツ科学辞典、大修館書店、1996
- 7) Döbler.H 著 谷釜了正訳：球技運動学、不味堂出版、1985
- 8) Fetz.F著 金子明友、朝岡正雄訳：フェッツ体育運動学、不味堂出版、1979
- 9) 稲垣安二：バスケットボールの攻撃における特殊戦術に関する一考察、スポーツ方法学研究12-1、1999
- 10) 稲垣安二：バスケットボールにおける速攻

- の体系化に関する一考察. スポーツ方法学研究13-1, 2000
- 11) 石塚浩：先取りの定義とその問題性に関する運動学的考察. 日本女子体育大学紀要16, 1986
 - 12) 石塚浩：「スポーツ戦術」に関する一試論「スポーツにおける戦術」(笹倉清則、石塚浩、小海隆樹、大門芳行、加藤昭、北川幸夫 他). 日本女子体育大学・日本女子体育短期大学トレーニングセンター紀要1, 1998
 - 13) 石塚浩：運動の先取りをどうとらえるか「運動学講義」(金子明友、朝岡正雄編著). 大修館書店, 1999
 - 14) Kern.J著 朝岡正雄訳者代表：スポーツの戦術入門. 大修館書店, 1999
 - 15) 金子明友著：わぎの伝承. 明和出版, 2002
 - 16) 金子明友：体育学習のスポーツ運動学的視座「体育・保健科教育論」(島崎仁、松岡弘編). 東信堂, 1988
 - 17) 金子明友、朝岡正雄編著：運動学講義. 大修館書店, 1999
 - 18) 岸野雄三代表編集：最新スポーツ大辞典. 日本体育協会監修. 大修館書店, 1994
 - 19) Meinel.K著 金子明友訳：マイネル・スポーツ運動学. 大修館書店, 2000
 - 20) 三上肇：動きの先取りを見つける「教師のための運動学」(吉田茂、三木四郎編). 大修館書店, 1996
 - 21) 長澤靖夫：達成力としての運動技能の構造「運動学講義」(金子明友、朝岡正雄編著). 大修館書店, 1999
 - 22) 中川昭：ボールゲームにおける状況判断研究のための基本概念の検討. 体育学研究28-4, 1984
 - 23) 中川昭：ボールゲームにおける状況判断能力とスキルの関係. 筑波大学体育科学系紀要7, 1984
 - 24) 中川昭：ボールゲームにおける状況判断能力とスキルの関係(II) -プレーヤー観察法を用いての検討-. 大阪教育大学紀要第IV部門39-1, 1990
 - 25) 中川昭：ボールゲームにおける状況判断能力と状況認知能力の関係. スポーツ運動学研究4, 1991
 - 26) Neisser.U著 古崎敬、村瀬旻訳：認知の構図. サイエンス社, 1985
 - 27) 日本バスケットボール協会編：バスケットボール指導教本. 大修館書店, 2002
 - 28) 新村出編：広辞苑 第五版. 岩波書店, 1998
 - 29) Roth.K：Taktik im Sportspiel. Karl Hofmann Schorndorf, 1989
 - 30) 佐野淳：運動の観察と分析「運動学講義」(金子明友、朝岡正雄編著). 大修館書店, 1999
 - 31) 佐藤靖：「運動の先取り」のとらえ方に関する一考察. 山形大学紀要(教育科学)8-2, 1983
 - 32) Stiehler.G、Konzag.I、Döbler.H 著 唐木國彦監訳：ボールゲーム指導事典. 大修館書店, 1993
 - 33) 瀧井敏郎：戦術の運動学的認識「運動学講義」(金子明友、朝岡正雄編著). 大修館書店, 1999
 - 34) 内山治樹：スポーツにおける戦術と戦術訓練の原理原則. 埼玉大学紀要教育学部(教育科学)44-2, 1995
 - 35) 内山治樹、大門芳行、小野毅：日本とドイツにおける球技戦術の理論分析. 埼玉大学紀要教育学部(教育科学)45-2, 1996
 - 36) 内山治樹：バスケットボールにおけるオフenseの基礎技術と個人戦術の精選構造化についての検討-Basketball Canadaと吉井理論の分析を通して. スポーツ方法学研究11-1, 1998
 - 37) 内山治樹・武井光彦・大神訓章・日高哲郎：世界トップレベルにおけるバスケットボールチームの集団戦術行動に関する研究-第18回アジア女子選手権大会のゲーム分析. スポーツ方法学研究14-1, 2001
 - 38) 内山治樹・武井光彦・大神訓章・大高敏弘・

佐々木桂二：バスケットボール競技における集団戦術としての「トランジション」に関する事例研究－第18回アジア女子選手権大会のゲーム分析－. 筑波大学体育科学系紀要24. 2001

- 39) Weizsäcker, V.v. 著 (木村敏、浜中淑彦共訳) : Gestaltkreis(ゲシュタルトクライス). みすず書房. 1975
- 40) 吉田茂、三木四郎編：教師のための運動学. 大修館書店. 1996
- 41) (財)日本バスケットボール協会規則審判部編：2001～2002年バスケットボール競技規則. 日本バスケットボール協会発行